

# 平成30年度あきた型学校評価

## (1)豊かな教育のある学校の実現

評価領域	豊かな教育
------	-------

重点目標	新学習指導要領の基本的な考え方に基づいた、キャリア教育の視点で小中高を貫く教育課程の編成。	P
現 状	<ul style="list-style-type: none"> <li>キャリア教育全体計画を基に立てた年間指導計画に従い学部毎に指導しているが、学部の接続をさらに緊密にしていく必要がある。</li> <li>地域の教育資源を活用した学習が増えてきているが、さらに卒業後を見据えて発達段階や生活年齢に応じた学習活動を充実させていく必要がある。</li> </ul>	
具体的な目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>社会的、職業的自立に必要な力を育成するために地域の教育資源を活用し、小学部、中学部、高等部を一貫した教育活動を推進する。</li> </ul>	
目標達成のための方策	<ul style="list-style-type: none"> <li>学校としての一貫性や各学部の特色を検討するとともに、活動の状況や課題と成果を確認するため、教育課程検討委員会を計画的に実施する。</li> <li>地域の教育資源やそれを活用した教育活動を整理するため、全教職員で共有する一覧表を作成する。</li> </ul>	
具体的な取組状況	<ul style="list-style-type: none"> <li>生活単元学習で地域の「人」「もの」「こと」とのかかわりを作業学習等では「地場産業との結びつき」などを重視した活動に取り組んだ。</li> <li>地域の教育資源を活用した教育活動を推進しながら、職員会議、学部会、研究会、交流推進委員会等で共通理解を図った。</li> </ul>	D
達成状況	<ul style="list-style-type: none"> <li>教育課程検討委員会の回数を増やしたり一覧表を作成したりするのではなく、既存の会議等を利用して、「地域」をキーワードとした情報交換等を行った。それぞれの学習活動の充実が図られている。</li> </ul>	
自己評価	<p style="text-align: center;">B</p> <p>「地域」をキーワードに様々な取組をした。満足感、達成感のある活動が多かったが、児童生徒の目標との整合性に課題がある活動もあった。「地域」から「何を学ぶか」を明確にして、一人一人の目標が達成できる活動を精選していく必要がある。</p>	C
<p style="text-align: center;">↑ 評価基準 ↓</p> <p style="text-align: center;">A : 具体的な活動がなされ目標を達成できた                  B : 具体的な活動はなされているが、目標は達成できていない                  C : 具体的な活動がなされておらず、目標も達成できていない</p>		
学校関係者評価と意見	<p style="text-align: center;">A</p> <p>地域での取組は前向きで成果の得られた良い活動である。前年よりさらに進んでいる。「教育あきた」や学校HPで実践的職業教育の取組が紹介されているが、販売までの経緯や背景についても紹介するとよい。職員の仕事は増えていないか。子ども達も行事に追われていないかという視点で見つめてほしい。</p>	C
自己評価及び学校関係者評価に基づいた改善策	<p>これまでの実績の成果と課題を生かして、さらに地域の教育資源を活用する取組を推進していく。</p> <p>教育活動の質を高めるために小中高それぞれの活動を全校で共有できるしくみをつくる。全校職員で多面的・多角的に考えたり関連付いたりしながら学校としての一貫性を明確にし、それぞれの発達段階に応じた効果的な教育活動を推進していく。</p>	

(2)豊かな地域生活への支援

評価領域	地域支援・地域交流
------	-----------

重点目標	児童生徒が地域で共に生きる力の基礎を培うための、居住地校交流や学校間交流、地域との交流活動の推進。	P
現 状	<ul style="list-style-type: none"> <li>小学部、中学部、高等部それぞれの段階に適した学校間交流を推進する必要がある。</li> <li>居住地校交流について小学部では定着してきた。中学部では実施に向けた働きかけを始めている。</li> </ul>	
具体的な目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>小学部、中学部、高等部それぞれ特色のある交流及び共同学習を実施する。</li> <li>交流相手校からの評価を生かしながら交流及び共同学習を充実させる。</li> </ul>	
目標達成のための方策	<ul style="list-style-type: none"> <li>相手校の状況や本校児童生徒の実態について密に情報交換を行い、計画的に学校間交流や居住地校交流をする。</li> <li>広報や地域行事への参加、地域での活動等により、地域に対して積極的に本校の教育活動を発信すると共に、地域からの評価について情報収集をする。</li> </ul>	

具体的な取組状況	<ul style="list-style-type: none"> <li>今年度から中学校への居住地校交流に取り組んだ。長年継続している小学部の実践をもとに、中学校の特徴を考慮した綿密な計画により実施した。障害理解授業を居住地校交流の事前に行うなど工夫しながら実施した。</li> <li>「みどりフェア」の開催等新規の取組をした。</li> </ul>	D
達成状況	<ul style="list-style-type: none"> <li>中学部の居住地校交流・学校間交流がスタートした。各学部が地域の資源を活用した活動を実態に応じて内容を工夫しながら行った。</li> <li>学校・地域事業所等との交流は93回、居住地校交流は小学部33回、中学部11回実施した。</li> </ul>	

自己評価	B	<p>中学部の居住地校交流・学校間交流は、有意義な活動となった。「みどりフェア」の開催により地域との交流をすすめることができた。取り組む中で交流を進めるための有効な方法が分かったり、活動を通して双方に成果が見られたりした。</p>	C
------	---	---	---

評価基準  
 ↓  
 A : 具体的な活動がなされ目標を達成できた  
 B : 具体的な活動がなされているが、目標は達成できていない  
 C : 具体的な活動がなされておらず、目標も達成できていない

学校関係者評価と意見	A	<p>生徒の自己評価や保護者の感想も取り入れて次年度につなげてほしい。特別支援学級との交流もあれば保護者同士のつながりも生まれる。中学校段階での交流は高校生になってボランティア養成講座の受講につながるなど期待できる。</p>	C
------------	---	--	---

自己評価及び学校関係者評価に基づいた改善策	<p>小学部の実績をベースにできたため、中学部の交流が順調にスタートできた。高等部は、作業学習や生活単元学習などで地域との交流を盛んに行った。近隣の高等学校との交流および共同学習の進め方が今後の課題である。障害理解授業の拡充も必要である。</p>	A
-----------------------	---	---